

# 東京藝術大学 COI 拠点



5月26日、G7伊勢志摩サミットのサイドイベント「テロと文化財—テロリストによる文化財破壊・不正取引へのカウンターメッセージ」にて、藝大COI拠点制作の高精細複製壁画「クローン文化財」（破壊されたパーミヤン東大仏天井壁画・焼損した法隆寺金堂壁画第6号壁）の2点が展示され、宮廻正明RLからG7首脳へクローン文化財について解説をおこなった。

安倍総理大臣からは、文化財の破壊は全人類の歴史、文化を破壊する行為であり、断じて許されない。不正取引はテロリストが自らの資金源にしている可能性があるとも指摘されている。この問題には、インターポールの盗難美術品データベースの更なる活用を含む政府間や国際機関を通じた協力に加え、美術品を扱う民間関係者からの協力も必要である旨発言した。

オランダ仏大統領からは文化財等の不正取引対策、文化財をテロリストの手に渡らせないための美術館への一時保管所の提供や緊急事態における文化財の保存計画の策定、遺跡の記憶の保存等の同国の取り組みや関連国際会議の開催提案について言及があった。

## G7伊勢志摩サミットにて クローン文化財を展示



(上)クローン文化財の意義について  
G7首脳へ説明する宮廻正明RL

(下)クローン文化財を触って、質感を  
確かめるG7首脳

Arts & Science LAB. COI news

# HYOUTRE

## Vol.5

発行：2016年6月30日  
編集：荒井純平論一郎・田中真奈子・保坂理和子・鏡持由起夫・青木光代  
制作：平論一郎  
発行者：東京藝術大学COI拠点  
東京都台東区上野公園1-28 東京藝術大学 Arts & Science LAB.  
Tel:050-5525-2464 Fax:03-3555-8709  
Mail:coi-info@ml.gendai.ac.jp Web:hp://innovation.gendai.ac.jp  
紙：J・ハント紙



## 開かれた文化の跳躍台

東京藝術大学ユーラシア文化交流センター

## 前田 耕作 特別顧問

ユーラシア文化交流センターがCOI拠点と協力し作成・開陳しているアフガニスタン特別企画展「素心 パーミヤン大仏壁画」(陳列館)は、連日多くの人びとを迎え入れ、活況を呈している。朝日新聞、読売新聞、NHKなど大きなメディアも深い関心をいだき、それぞれの観点からこの特別展を取り上げ報じてくれたこともあるが、なにより嬉しいのは、見終わった人びとが一応に感動の言葉を洩らして下さっていることである。

このプロジェクトの目的の一つは、地中海世界と太平洋世界をつなぐ文化の結節点に光を当てることによって、東京藝術大学に新たな保存と創造という強靱なバネのきいた協働の跳躍台を生み出すことにあった。文化財の保存は、それ自体大変な費用を要するものであり、見込まれる負担のために敬遠されがちであったが、世界の視点は大きく変化している。

文化財(cultural property)はもはや私財などではなく、国域を越え、未来へと受け渡されるべき人類共通の文化遺産(cultural heritage)であるという認識が世界で共有化されつつある。

こうした視座の転換を見据えて、多層の文化を掘り起こし、精神を美のなかに到来させる技と保存の技術(technē)を交叉させながら、それぞれが個別の領域を踏み出し、新たな跳躍をこころみる発条を共有し、協働しないかぎり、世界へと通じる未来は開けない。

翼一枚では乱気流の世界を横断することはできない。



復元された「天翔る太陽神図」(アフガニスタン特別企画展会場)

まずコンサートは、共感覚メディア研究グループの作成した映像とピアノ連弾とのコラボレーションで開始。事前に、演奏者を3Dスキャン撮影し音楽に合わせてアニメーション化した映像と、ピアノ連弾の生演奏とを組み合わせで上演した。

楽器演奏体験ワークショップでは20名ほどの子供達を舞台上げ、2つのグループに分ける。まず1つ目のグループは、指導者が叩くりズム(3-4種のリズムパターン)をコングや小太鼓を叩いて真似する。続いて2つ目のグループは一人一つずつトーンチャイムを持ち、音を順番に重ねていって和音をつくる。さらに客席にはフィルムケースにビーズを入れた打楽器を配っておきリズムで合奏に参加する。最後に2つのグループと客席全員で、1つの楽曲演奏を完成させるという流れ。聴覚障がいの子供達が目を輝かせて合奏に参加していた。

また全盲で聾のピアニスト塚田哲夫が、ピアノの超絶技巧曲であるリスト作曲「愛の夢・第3番」を非常に美しい音で演奏。音が聞こえない状態で一体どのような「楽曲の像」を想像しながら演奏しているのだろうか、興味は尽きない。そして人工内耳装用者のマリンバ奏者・普天間健が、現代作曲家によるマリンバ作品を披露。難聴とは思えないデリケートな音色で聴衆を魅了した。



ピアノと映像のパフォーマンス(共感覚メディア研究G+障がいと表現研究G)

「音が聴こえる」ことと、「音楽を楽しむ」ことはまったく別次元の感覚であることを知る貴重な機会となった。



## 共感覚メディア研究グループ発表会

共感覚メディア研究グループはこれまでにArts & Science LAB.のドームシアターの整備を行ってきたが、特にJSTからプロジェクションシステム構築の予算措置を受けて整備が大きく加速した。また平成27年度は奏楽堂をはじめドームシアター以外の場所に向けて映像を制作、展示してきた。このような中でドームシアターの整備完了と今年度制作した映像の上映を兼ねて、3月31日に発表会を行った。

越田乃梨子特任研究員らによる演出のもと、第一部「球形シアター」では半球スクリーンを生かした検証用映像を展示した。さらに牧奈歩美の「Fossil Tears -融心石-」を投影し、既存の映像を変換プログラムを通してスクリーンに投影した場合も、球形ドームによる没入感が得られることを確かめた。第二部「映像インスタレーション」では、障がいと表現研究グループの新井鳴子GL、高橋幸代特任研究員によるドビュッシー「小舟にて」のピアノ演奏があり、それに同期して薄羽涼彌による映像を上映した。演奏者二人が映像の中に同じ服で現れるが、これは事前に演奏時と同じ服



## 聴覚障がいと音楽

## &lt;音をさわろう&gt;コンサートを実施して

去る3月27日、障がいと表現研究グループと洗足学園音楽大学附属音楽感受研究所(難聴研究)との共同共催により、主に「聴覚障がい者」を対象としたコンサートとワークショップ<音をさわろう>を藝大音楽学部第6ホールにて開催した。補聴器装着者や人工内耳装用者の子供から大人・高齢者まで約180名の来場者が、音楽と映像とのコラボレーション、打楽器演奏体験、絵本の朗読と音楽の組み合わせによるオリジナル作品等のプログラムを楽しむ。またパイオニア株式会社提供「体感音響システム」(会場の音楽をマイクで拾い、座席の赤いクッションに音を振動として送る)の使用や、司会や朗読の言葉をスクリーンに要約した字幕で投射するなど伝達手段にも様々な工夫を凝らし、タイトルどおり多様な角度から「音」に「さわれる」コンサートとなった。



この公演のソリストは、日本人(本学出身の藤村実穂子)、アメリカ人、デンマーク人、ポーランド人と最近ドイツ国籍を取ったウクライナ人。主要スタッフにもドイツ人はいない。しかし、そのことを問題にする雰囲気は全くない。ドイツの公立劇場の役割は、一つでも多くの歴史に残る作品を生み出すことにあり、もちろんそこでは国籍や民族は問題とされない。

あるいは前述したように、「福島を題材に」という依頼も歌劇場からのものであった。欧州の公共劇場においては、その時代に社会が抱える問題については、議論の題材となるような作品を作り続けることが使命だからである。『海、静かな海』は、幸いにして、それらの期待に応えられた作品になったと思っている。

備えてきた。それら102点の文化財が、ついに2016年に返還されることとなった。平山先生の遺志を受け継いで開催された今回の特別企画展において、返還の決まった流出文化財とともに、文化共有グループが制作した「クローン文化財」を展示した。

幅6m、奥行き7m、高さ3mに及ぶ「天翔る太陽神」のクローン壁画は、2001年に偶像崇拜を禁じるタリバーン・イスラム原理主義勢力によりパーミヤンの東大仏とともに破壊された仏龕の天井壁画を、原寸大で復元したものである。この天井壁画には、中央に馬車に乗る太陽神、天使のような翼をもつ侍者や風神のような飛天、その周囲に供養者や仏陀が描かれ、パーミヤンがさまざまな宗教が共存する東西文明の十字路であったことを証している。そのような象徴的な文化財の破壊が行われる事態に直面して、失われた壁画をはじめとするパーミヤンの文化財を再生させた今回の復元プロジェクトは、世界に向けて平和を願う心を伝えていく日本の文化外交の在り方を示す意義深いものである。

クローン壁画の観覧者は、今は失われた大仏の頭上に立ち、かつて大仏の頭上に描かれていた壁画を見上げる臨場感を体験することが可能となった。壁画の奥の壁面には、最新のCG技術を用いてパーミヤンの渓谷の風景を再現した4K映像を投影し、かつて東大仏が見ていたであろう光景が再現された。

また、流出文化財のうち、パーミヤン石窟の壁画の部分を構成していた「仏座像」三点について、現状の部分的な欠損が



アイハムム・ゼウス半身像復元

生じる以前の状態を想定復元したものと、現状を再現し「さわれる文化財」としてよりリアルな鑑賞体験を提供するものの二種類を制作・展示した。

「クローン文化財」の言葉には、私たちの制作物が単なるコピーやレプリカではなく、原作から学び取ることでできる技巧や精神性や創造性を受け継ぎ、未来へと伝えていく日本の模写の精神に則ったものであるという意味が込められている。そのような芸術家の感性や卓越した手作業の力と、最先端のデジタル撮影技術や編集技術、

東京藝術大学アフガニスタン特別企画展「素心 パーミヤン大仏天井壁画～流出文化財とともに～」

## 失われたパーミヤン東大仏仏龕壁画

## 「天翔る太陽神」世界初の復元

アフガニスタンの内戦の混乱下で非合法に国外へ流出した貴重な文化財を、平山郁夫先生を代表者として2001年に設立された流出文化財保護日本委員会は「文化財難民」として日本で保護・修理し、アフガニスタン政府への返還に



復元された「天翔る太陽神図」(上部)と現在のパーミヤンの風景(中央の映像)

生じる以前の状態を想定復元したものと、現状を再現し「さわれる文化財」としてよりリアルな鑑賞体験を提供するものの二種類を制作・展示した。

「クローン文化財」の言葉には、私たちの制作物が単なるコピーやレプリカではなく、原作から学び取ることでできる技巧や精神性や創造性を受け継ぎ、未来へと伝えていく日本の模写の精神に則ったものであるという意味が込められている。そのような芸術家の感性や卓越した手作業の力と、最先端のデジタル撮影技術や編集技術、

「壁画 仏座像」(さわれる文化財)



## オペラ『海、静かな海』

2015年12月から、ほぼ2ヶ月間ドイツ・ハンブルクに滞在して新作オペラ『海、静かな海』を制作した。ハンブルク州立歌劇場から、東日本大震災、とりわけ福島のことについて書いてくれと言う新作委嘱があったのは三年前。そこから原作を書き、それがドイツ語に翻訳され、さらにそれを専門家がリブレットと呼ばれるオペラの歌詞に直し、さらにそこに本学出身の細川俊夫氏が曲をつける。このような経緯で、今回は、ヨーロッパでも非常に珍しい新作オペラの作・演出を体験することとなった。

また、この作品は、世界初の本格的なロボットが登場するオペラとなった。当初は、そのような予定はなかったのだが、この歌劇場の音楽監督でもあるケント・ナガノ氏から強い要請で、一年前にロボットを出すことが決まった。





東京藝術大学ユーラシア文化交流センター

## 井上隆史 客員教授

2015年7月より、東京藝術大学はユーラシア全体の文化遺産の保護・修復・複製制作・遺産活用にご貢献する事業を実施するべく、新たに「ユーラシア文化交流センター」を設立した。センター運営に携わる井上隆史客員教授に、センター設立の目的と今春に開催したアフガニスタン特別企画展について話を伺った。

文化外交・交流の基幹へ  
ユーラシア文化交流センター設立

ユーラシア文化交流センターは、東京藝術大学社会連携の一環として、ユーラシアの文化遺産の保護や修復、複製制作、遺産活用などの国際的事業ネットワークの役割を担うため、昨年7月に発足しました。

戦禍や劣化などで失われてゆく文化財の保護や修復を望む国々に対し、日本が保存修復の技術力で応えていく重要性を切に感じています。当センターの拠点となる東京藝術大学には、日本を代表するデジタル技術や文化財修復スキルがあります。藝大が今まで培ってきた技能と最先端技術を応用し、「文化」で世界にご貢献する事業が大いに期待されています。

日本画家で東京藝術大学元学長を歴任された故平山郁夫先生とシルクロードを巡る取材に同行した際に伺った話を思い出します。政治が外交を阻む壁を作ってしまったとしても「文化」によってその壁は越えて行けるものであるはずと平山先生は常々語っていました。

もちろん、外交を行う上で日本政府が強い姿勢を示すことも時には必要です。しかし、その一方で、遺跡保護などの文化的交流で結ばれた関係を育むことは、国家間の緊張関係が解かれたとき、大きな役割を担うはずで

アフガニスタンを知って下さい  
そして忘れないで下さい

平成28年4月12日から6月19日まで東京藝術大学 陳列館で「アフガニスタン特別企画展 バーミヤン大仏天井壁画～流出文化財とともに～」を開催しました。1階には保護された壁画の一部と解説映像、アフガニスタン アイ・ハムムの遺物 ゼウスの左足をもとに、藝大で想定復元されたゼウスの胸部までの像などを、2階では、アフガニスタンで撮影した動画映像、洞窟壁画やパネルの展示を行いました。来場者からはメッセージ性が高く、印象に残る展示であったなど温かい感想を寄せられており、とてもうれしく思います。

以前アフガニスタンから学生を招き、日本の学生とディベートを行う事業に参画したことがありました。ディベートの中でアフガニスタンの学生が語った「アフガニスタンを知ってください。そして忘れないで下さい」という言葉がとても印象的でした。このアフガニスタン特別展をきっかけに、多くの来場者がアフガニスタンの現状や将来への関心を深めてもらいたいと願っています。

展示会場2階に展示されていた洞窟天上壁画には、風神が描かれています。風神というモチーフは、俵谷宗達によっても描かれてきたように、古来から日本人の間でも親しまれてきましたが、その起源はギリシャにあると言われています。日本へは、シルクロードを渡って伝えられたと考えられますが、その中継地点にアフガニスタンが位置していました。

15年前(2001年)この洞窟天上壁画はタリバンによって破壊されました。展示作品は、宮廻正明研究リーダーのもと、COI拠点文化共有研究グループが可能な限り詳細な復元制作に挑んだ力作です。

洞窟天上壁画復元に活かされた  
15,000点の写真データ

かつて文化財の保護とは、受け継がれてきた遺跡や文化財そのものを継承していくことに重点が置かれていましたが、今はそれも難しくなっています。

文化財を後世へ残し伝えたいという願いは、テロリストには残念ながら届きません。このような情勢下において、写真やバーチャルな文化財の記録を残しておくことは急務とされているのです。

アフガニスタン特別展で展示した洞窟天上壁画の復元には、京都大学人文科学研究所に保管されている15,000点の中判ポジフィルム(陽画)の存在が欠かせませんでした。この天井壁画の図像写真データは、1970年代に京都大学樋口隆康先生の調査団によって記録・保管されていたものです。画素数の多い現在のデジタル記録であったら、さらに細かい描写を再現できたであろうと思います。

これらの写真データの記録をもとに、藝大が有する3D最先端技術、そして文化財や仏像修復などで培ってきた伝統的な復元技術の結集が今回の「洞窟天上壁画復元」作品でもあります。藝大の持つこれらの技術は、文化財保護事業として大いに期待されているのです。

一方で、藝大も今以上に社会へ成果を発信をしていく必要があります。民間ではなく、大学であるからこそできる事業が強みとなるはずで

修復対象を日本で修理後、  
返却する病院的機関をめざして

日本では2006年「海外の文化遺産の保護に係る国際的な協力の推進に関する法律」が施行されました。しかし現状では、海外からの文化財修復の要請に迅速に対応しなければならない場面で、多国間で行う保存事業において遅れを取る場合が少なくありません。日本が誇る技術を活かすためにも、修復が求められる文化財を日本で修理したのち、依頼国へ返却する拠点となる病院的機関の設立が求められています。

文化遺産保存分野における日本の技術の国際的認知度を高め、国際協力の場合から日本が後退することの無いようにするためにも、ユーラシア文化交流センターが躍進していくことを願っています。

マヌーディ前カブール博物館長講演会  
(アフガニスタン特別企画展会場)